

KITOGO-HAN 木と合板

木とひと、暮らしを結ぶ誌上博物館

WINTER 2015

32 冬号

8年の歩み

◎ 中大規模木造建築の時代へ—求められる知的インフラ整備 スタートした「木構造テラス」の活動！
 ◎ 實成康治氏（ウッドハブ合同会社代表）が語る
**構造設計ノウハウの共有化で、
 非住宅木造市場創造の可能性に挑む！**
 ◎ 第3回「合板の日」記念式典が開催されました
 ◎ 木材・合板博物館は公益財団法人となりました
 ◎ インターンシップによる学生たちの受け入れ
 ◎ 新木場漫步
 川上から川下まで、よりシームレスに結ぶ仕組みづくりをめざす
 木と緑をコーディネートする木材総合商社
 物林株式会社

◎ エコプロダクツ2015〜森林からはじまるエコライフ展〜に出展しました

木材・合板博物館からのお知らせ



第3回 ウッドマスター(中級)講習会を開催しました

2016年1月30・31日の2日間、第3回ウッドマスター（中級）講習会—樹種識別の実際を学ぶ—『誰にでもできる木材の樹種鑑定』を開催いたしました。木材の組織構造の基礎と実学に役立つ樹種識別のための知識、また木材の材質に関する基礎知識を学んでいただくことを主な目的としています。針葉樹材の流通している主なものの9樹種、有用広葉樹8樹種の17種類の木材を対象に、光学顕微鏡を使った樹種識別の実習を行いました。2日目には慣れた手つきで切片を切り取り、プレパラートに乗せて顕微鏡を覗く受講者の皆さんの姿が見られました。興味のある方は次回ウッドマスター講習会に是非ご参加ください。

ウッドマスター（中級）講習会日程

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
平成28年 1月30日 (土)	講義1 ・針葉樹の組織など	実習1 ・識別の実際 ・針葉樹の樹脂道	実習2 ・樹脂細胞 ・らせん肥厚	講義2 ・木材の材質1	講義3 ・木材の材質2	実習3 ・分野壁孔と放射仮道管 ・針葉樹識別テスト
平成28年 1月31日 (日)	講義4 ・広葉樹の組織など	実習4 ・道管と柔組織の配列 ・道管のせん孔	実習5 ・道管のらせん肥厚 ・広葉樹の放射組織	講義5 ・樹種の材質特性	実習6 ・広葉樹識別テスト ・自由観察	質疑応答 ・アンケート回答 ・自由観察



公益財団法人 木材・合板博物館のご案内

アクセス

東京メトロ有楽町線
JR京葉線
東京りんかい高速鉄道
新木場駅
徒歩7分

東京メトロ東西線
東陽町駅
バス
都営バス〔②のりば〕木11甲
→新木場一丁目バス停→徒歩1分



開館時間

10:00～17:00
(最終入館時間 16:30)

入館料

無料

休館日

月曜日、火曜日、祝日 年末年始
 *都合により開館日・時間を変更することがあります。
 *幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
 *団体での見学は事前にお申し込みください。



表紙：長野県小県郡長和町に2014年10月3日竣工した、ながと保育園。長和町地域産材の木材を使用。
 (本誌「中大規模木造建築の時代へ—スタートした「木構造テラス」の活動」参照)

木と合板 第32号 2016年3月15日発行 定価:540円(消費税込)

発行：公益財団法人 木材・合板博物館
 〒136-8405 東京都江東区新木場一丁目7番22号(新木場タワー)
 TEL.03-3521-6600 FAX.03-3521-6602 Eメール:info@woodmuseum.jp
 編集：「木と合板」編集委員会
 制作：株式会社デジタルアート



公益財団法人 木材・合板博物館

<http://www.woodmuseum.jp>

木材合板 で 検索 クリック!!

中大規模木造建築の時代へ―求められる知的インフラ整備 スタートした「木構造テラス」の活動！

實成康治氏（ウッドハブ合同会社代表）が語る 構造設計ノウハウの共有化で、 非住宅木造市場創造の 可能性に挑む！



終始笑顔で屈託なく、情熱的に語る實成康治氏

中大規模木造建築の時代が幕を開けようとしています。2020年東京五輪・パラリンピックのメイン会場となる新国立競技場の設計案にも木質化が盛り込まれ、話題となっています。木材利用は、地球環境保全に欠かせない役割を担います。建物の木質化は時代のトレンドとなりつつあります。

昨秋10月22日、新木場タワービル1階ホールを会場に、「木構造テラス」設立セミナー、「中大規模木造設計のはじめの一步」が開催されました。定員を上回る参加者が集まり、その盛況ぶりに関係者の関心の高さがうかがえます。

さて、「木構造テラス」とは？ その狙いとは？ 当日、同セミナーのオープニング趣旨説明、さらにテーマ「構造設計・計画の基本の「木」」の講師を務めた、實成康治さん（木構造テラス代表理事）に語っていただきました。



木構造が持つ可能性と、

ネックとなっている課題

―「木構造テラス」設立に至る経緯をお教えいただけますか？
個人的な経歴から言いますと、私は集成材メーカー（銘建工業株式会社）で大断面木造の設計・施工を担当していたんです。初めて設計したのが非住宅、スパン25mの体育館でした。木構造専門業者が、そのノウハウや加工技術を駆使すれば、木構造でもかなり大規模な建物が実現可能です。まだまだ大きな可能性を秘めた世界です。しかし、大規模木造建築の技術は特殊で一般化しにくい側面ももっています。

木造の設計でいちばん難しいのは接合部の設計で、ここが最も厄介な箇所と言えます。一般化させるひとつの方法は接合金物の標準化です。これを標準化してオープンなものにすれば、もっとひろく自由な架構ができるようになると考えました。そこで集成材メーカーから金物メーカー（株式会社タツミ）に転職して接合金物の開発に取り組みました。特殊なものを一般化し、工務店や職人さんが誰でも採用できるように一般に公開された工法（オープン工法）の接合金物として開発し普及させる。そうすれば、木を使う可能性が広がり、S造^{※1}やRC造^{※2}と同じように、木造も非住宅建築を設計する際の選択肢の一つになり得るはずと考えました。金物を開発しセミナーや勉強会を重ね、そこで気づいたのは、木造の世界で非住宅木造建築の構造設計を扱える人の数がそもそも少ないという現実でした。住宅とは違い、非住宅の中大規模木

- ※1 【S造】主要構造部分に鉄骨を用いた構造物
- ※2 【RC造】主要構造部分に鉄筋コンクリートを用いた構造物



大規模木造建築

特殊解

造建築の場合は、構造設計が必要になります。構造設計の原理そのものはS造・RC造と基本的に同じですが、木造では構造計算の方法や計算のルール、接合部の考え方、構造的な法規制も違います。それら手法の開発とノウハウの蓄積は各企業で独自に進められていますが、木構造の構造設計者育成には、企業枠を超えたオープンな「情報提供の場」が必要だと思ひ至り、その思いを共有する人たちが軸となつて「木構造テラス」の出発となりました。



スパン10m礼拝堂（㈱タツミ発行冊子「テックワン P3 PLUS」より）



設立セミナー實成氏による趣旨説明に使われたPPTから



高耐力プレースの活用（㈱タツミ発行冊子「テックワン P3 PLUS」より）



スパン12mの工場（㈱タツミ発行冊子「テックワン P3 PLUS」より）

顔の見える継続的な関係で、
情報を共有する

「場」としてのテラス

「テラス」発足に至る前に、セミナーや勉強会を重ね、2年間で2000人ぐらいの人に話したかと思えます。ソフトメーカーさんとも組んで、半日で5回、20名規模のスクールも開催し非常に好評でした。しかし、1〜2時間のセミナーでは基本的なことは学んでもらえませんが、実行するまでには至りません。実際に実行するためには、やはりそばに相談できる人がいないと難しい。設計者の皆さんに自由な設計をしてもらせる環境づくりと、継続的に情報を共有し合える関係、場所、組織が必要と考え「テラス」という発想に至りました。

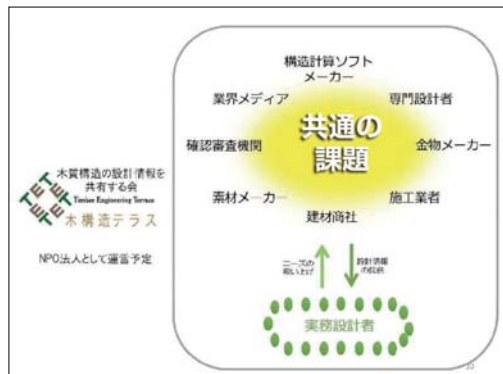
テラス」を作ることを目指しています。

現在の木造業界は、実は非常に高いポテンシャルを有しています。構造用集成材業界も、プレカット業界も、木材流通業界も、モノを供給するインフラという面ではかなり進んでおり、特にプレカット業界では効率的に進んでいるとも鉄骨ファブリケーターより進んでいると思います。けれども、そのためには構造設計というプロセスが必要で、そこが不十分で住宅の域を脱することが出て来ないでいます。自分たちの業界が持っているポテンシャルを活かしきれいなのです。

私が開発した中規模木造に対応できる接合金物を活用すれば設計の自由度は本当に広い。例えば、スパン12mの工場建築においてコスト面でもS造にひけをとらない計画

「木構造テラス」は通称で、正式には「木質構造の設計情報を共有する会」です。特定の企業に利益誘導するための団体ではありません。非住宅分野の木造建築を設計する際に、必要な情報を広く共有する「場」

画も可能です。補助金は1円も使わずにS造より安くできた事例も多数あり、それが出来るのです。じつは必要な道具は全部市の中にそろっている、接合金物は一般に公開された工法なの



木構造テラスの構成イメージ (趣旨説明PPTから)

設立セミナーで、オープニングの設立趣旨説明に立つ、實成康治氏



新木場タワー1階大ホールを埋め尽くした、
設立セミナー参加者

で実現できる一地に
足のついた設計情報」

に、非住宅の世界では使ってもらえない。そもそもプレカット工場は構造設計の専門ではないので難しい。少し大きな建物でも木造で建てたい人が沢山いて、必要なインフラもそろっているのに建物が実現できない。そういうジレンマのある状況を変えたかった。

ならば、今世の中にある住宅供給インフラの世界と、構造設計というインフラをリンクさせ互いに協業する様にできれば、S造、RC造に並んで木造が存在できるようになるのではないかと……。

になるのではないかと……。

かつた。

ならば、今世の中にある住宅供給インフ

昨秋の設立セミナーでは、構造計算ソフトウェアカーの方にも講師参加を求め、木造計算の対応ソフトや、インターフェースの紹介に力を注ぎました。木造業界の各社と構造計算ソフトウェアカーが連携して、スパコン10m程度の公民館、店舗、事務所、保育所等の非住宅を本来の木造らしいコスト

で実現できる一地に
足のついた設計情報」

「非住宅木造市場」を創造する

市場の合理性に適う

実感から言いますと、材木業界が主導すると、材木、材木しすぎるくらいがあつて、何でもかんでも「木」でやろうとする（笑）。でも、マーケットが求めているものは合理性です。木と鉄と、同じようにできるんだつたら木でやろう。でも、木が鉄の倍のコストがかかるんだつたら、それはあり得ない。現在の大規模木造は補助金でなりたつ『特殊な木造』という側面が強すぎるために、ふつうの建築マテリアルとして世の中で活用してはもらえないのが現状です。

私の話に関心を寄せてもらえたのは、私自身が金物を開発し、それを活用して、実際にこれだけのものがふつうに木造で出来ますよ、ということを示せたからだと思うのです。これから何か新しいものをつくらなきゃいけないとか、基準を変えなければならぬとかということではなくて、今現にあるもので、ここまで出来ますよと……。何億という巨費を投じて大規模なものを作って、それで終わりというのではなくに、1千万、2千万という単位で、それが何千棟と建つようにならないと市場は形成できません。

人口減少も含めて住宅建築の市場はこれから縮小していきます。では、木質業界はどこに活路を見出すか？ それには、補助金を使わずに非住宅の木造がふつうに建てられるようになる、例えば、コンビニのような建物や500㎡くらいの店舗であれ

ば、ふつうに建つようにしなくてはなりません。

「こんなふうによれるはずだと思っていたことが、やってみたら出来た！」という確信が自分の中にあります。これを皆さんと共有できるようになったら、自分の作った製品も役に立つのかなと、期待しています。

「共通言語」で結びつく、
企業枠を超えた取り組みへ

— 今後の活動計画について

まずは全3回のスクールを開催する予定です（1月26日に第1回を実施）。今まで木造に取り組みたい、興味はあるが、なかなか着手できていないという構造設計者の方々向けに、まずは「共通言語」で話ができるようになる必要があります。そのため、基本的基礎的なスクールの隔月で1月、3月、5月に行います。そこで、皆さんが「木造って、こうなんだね」と互いに「共通言語」を解するようになった次のステップで、今度は各バートを深掘りしていきます。例えば、耐火火であれば木をあらわしで扱うため燃えしろ設計で対応する場合などのケースです。全部を燃えしろ設計にしたらコストがかかるが、安く仕上げるにはこんな方法があるとか、具体的に細かな問題を掘り下げます。

テラスのメンバーにオブザーバー参加のかたちで、審査機関の「ハウスプラス確認検査(株)」さんに加わって頂き、モデルプラ

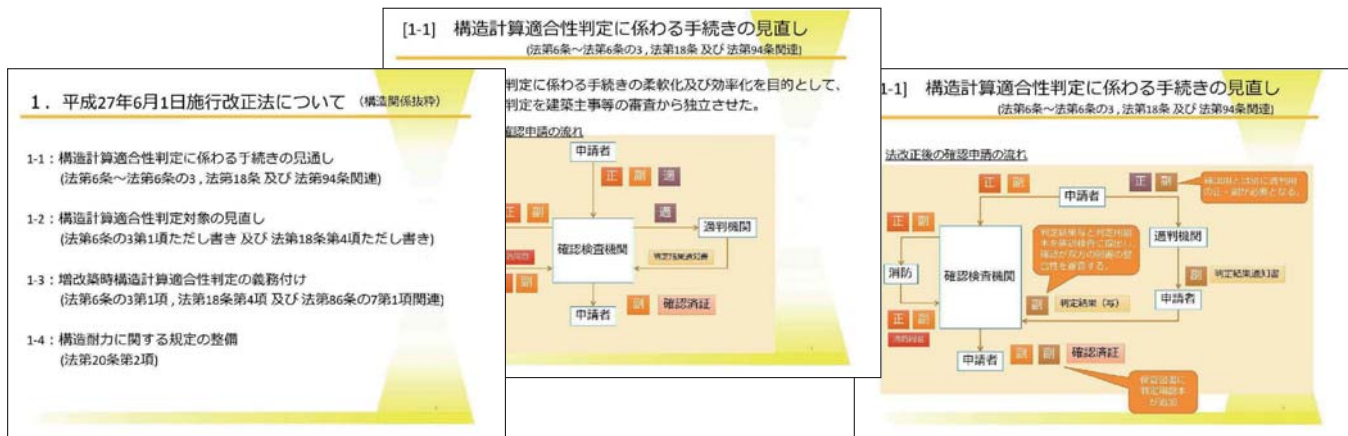
ンに対して申請と審査のロールプレイのよ
うなものをやってみようかと考えていま
す。同社は非住宅の木造に積極的に関わっ
ていきたいという考えがあり、審査機関が
審査し易いものを設計者が提出できるよう
情報提供する狙いがあります。オープンな
シーンでは言いづらいことも会員制のクラ
ブなら、細かいニュアンスも伝えられるの
ではないかと期待しています。

金物メーカーも参加していただしていま
すしハウスプラス確認検査(株)さんは試験施
設もお持ちですので、実際に見学して設計
者が自分たちの扱う「許容耐力」を体感し
てもらえるような「場」を提供する。そん
なことも視野に入れています。

そうして、設計者の皆さんの手が動くよ
うになったら、今度は実際に建ったものを
発表し、その設計情報の開示できるものは
アーカイブし、他の会員さんに同等のケー
ス事例としてご活用頂けるよう情報提供を
していきたいと思っています。

最初は、私たちからの情報提供がメイン
になるかと思いますが、『枠を超えて会員
同士が横につながった情報共有ができる』
そういう情報交換の場に育てていきたいで
すね。

すね。



ハウスプラス確認検査株式会社によるセミナー資料「確認検査における よくある指摘事項と注意点」



株式会社構造システムによるセミナー資料 「構造設計へのソフト活用のポイント」第1頁

を共有します。目標は「非住宅木造市場」の創造です。



日の出町公民館 設計:株式会社雄建築事務所 所在地:東京都西多摩郡日の出町 施工:扶桑建設 木質構造部材:LVL 使用樹種:スギ(多摩産材)、カラマツ 使用量(材積):110.50㎡ 延床面積:950.86㎡ コメント/地元・多摩産材LVLを活用し、吹き抜けによる広い館内を実現。



ながと保育園 所在地:長野県小県郡長和町 木質構造部材:集成材 使用樹種:地場産カラマツ 使用金物:プレセッターSU 延床面積:1662㎡ コメント/広くて大きな空間を立体トラスで実現。地域産材を使用し自然に親しむ町のランドマーク。



リゾートホテル ペラピスタ境ガ浜 レストラン棟 設計:株式会社NAP建築設計事務所/株式会社山田憲明構造設計事務所 所在地:広島県尾道市 木質構造部材:製材品 施工:大和建設株式会社 木質構造部材:製材品、構造用合板 使用樹種:地場産アカマツ、針葉樹、ラワン 使用量(材積):21.49㎡ 延床面積:950.86㎡、119㎡(鉄骨造地上1階建て) コメント/細部材をトラス形状に組み合わせ、梁間×桁方向の空間へ74フレーム並べた。主要フレームの接合部には金物と木造古来の組子技術を採用。

市場にはまだ大きな伸びしろがある

木材業界が持つ可能性は、まだ秘められた状態にあります。それを活かせるのは、企業の枠組みを超えた結びつきではないかと思えます。例えば、プレカット工場と構造設計者とが、互いに共通言語を介して連携するだけでも可能性は大きく拡がります。木材業界が建築の構造に疎いという弱点が克服されるなら、市場に今以上に競争力のある商品を提供し、需要を喚起してい

くことが出来るはずですが、住宅着工件数そのものは減っても、木造市場にはまだまだ大きなポテンシャルがあると思えます。その潜在的な需要を顕在化させるためには勉強しなければいけないことはたくさんあり、腰の上がりにくいところもありますが、それを後押ししていくようなことも、木構造テラスでは積極的に発信していきたいと思えます。



●實成康治(じつなり こうじ)氏のプロフィール

2004年 東京理科大学工学部第2部建築学科 卒業
2004年 銘建工業株式会社入社(大断面木造の設計・施工に従事)
2012年 株式会社タツミ入社(接合金物の開発に従事)
中規模木造対応金物「デックワンプ3プラス」を考案
2015年 ウッドハブ合同会社設立 同代表

●木構造テラス(Timber Engineering Terrace)

【正式名称】木質構造の設計情報を共有する会
(通称:木構造テラス)
<http://www.t-e-terrace.com/>
2015年12月9日 「木構造テラス」第一回総会を開催
2016年 3月16日 第2回 構造設計スクールを開催
【参加企業】正会員14社/賛助会員8社/オブザーバー1社/利用会員44名(2016年3月9日現在)

●ウッドハブ合同会社

Timbere engineering company
[中・大規模木造建築の構造設計 接合金物の開発コンサルティング]
〒955-0844 新潟県三条市桜木町12-38 202号室
TEL / FAX 0256-64-7588
E-mail:k-jitsunari@woodhub-llc.com

第3回「合板の日」記念式典が開催されました

11月3日は、日本の合板誕生の父、浅野吉次郎氏が独自に開発したベニヤレースで、1907年にわが国初の合板を製造した日です。この日を、わが国合板業界の発展を祈念する日として、2013年、公益財団法人木材・合板博物館と日本合板工業組合連合会が提唱し、「合板の日」が制定されました。

昨秋の2015年11月6日、新木場タワービル1階大ホールを会場に、林野庁をはじめ関係官庁、合板業界団体、関係者250余名が一同に介し、第3回「合板の日」記念式典が開催されました。

第3回の功労者は、国立研究開発法人森林総合研究所による合板産業への貢献に対して贈られました。

吉田繁博物館理事長からの謝辞、続いて来賓として今井敏林野庁長官、寺崎久明東京都産業労働局農林水産部長から祝辞をいただきました。

岡野健館長から、森林総合研究所の合板開発への功績紹介を受け、今井敏林野庁長官、井上篤博日本合板工業連合会会長から表彰状、感謝状、副賞が授与されました。

この後、森林総合研究所理事長の沢田治雄氏による受賞挨拶、講演会では同研究所フェロー兼セイホク株式会社技師長の神谷文夫氏から「ネダノンの開発」、また同研究所複合化研究室長の洪沢龍也氏による「国産材を活用したコンクリート型枠合板」について、それぞれ記念講演がありました。

場所を18階に移し、行われた懇親会は、牧元幸司林政部長の乾杯の音頭ではじまり、吉条良明全国木材組合連合会会長による中締めを受けて盛会のうちに終了しました。



壇上の森林総合研究所の皆さん。右端、沢田治雄理事長

新木場タワービル1階大ホールを埋め尽くした関係者

盛況となった懇親会(新木場タワービル18階)

懇親会で冒頭挨拶と乾杯の音頭をとる牧元幸司林政部長



未来へと開かれた博物館への飛躍

公益財団法人 木材・合板博物館

理事長 吉田 繁



公益財団法人木材・合板博物館が目指すもの

公益財団法人 木材・合板博物館

館長 岡野 健



日本に合板が誕生して100年を期に、2007年に木材・合板博物館を新木場タワービルにオープンして、はや8年が経ちました。当初は特定非営利活動法人として出発した当館ですが、昨年2015年8月に運営主体を公益財団法人に昇格させることが出来ました。これは一重に8年間の活動の積み上げによってなったものです。これまでご協力を賜った木材業界の皆様、有識者の皆様、また来館下さった皆様には厚く御礼を申し上げます。

この8年間、来館者は毎年1万人を順調に数えています。5年目の2012年に、合板誕生の父、浅野吉次郎氏のご遺族、中日本合板工業組合さんのご厚意を得て、氏の遺物とともに氏の特設展示コーナーを開設できたことは誠に栄誉なことでした。また、木に関わる担い手養成の機会として開催したウッドマスター（基礎）、（中級）講習会も好評をいただいております。法人昇格を期に、これら活動をさらに一層充実、飛躍させるべく意欲を燃やしております。

運営主体の昇格に伴い、活動領域を拡げることが可能になります。博物館は現在、新木場タワー内にあり、来館者には不便なことも否めません。そこで、新木場に新たな博物館施設を独立した木造施設として竣工することを構想中です。

博物館事業と並んで、木材を学びたいと希望する学生への支援、育成事業に着手したい。また、博物館を活動スペースとして広く提供し、木に関わる各関係機関との連携も深めたい。アートギャラリーなど展示内容をさらに拡充させ、カフェなども新設し、来館者の皆さんにとって快適な空間づくりもしたい。木材に関わる文化の発信地、木と木の大切さを未来に伝える博物館として面目をさらに一新させ、業界活性化に役立ちたい。夢は広がるばかりですが、当館の趣旨と一同の熱意を深くお汲み取りいただき、関係する皆様の今後なお一層のご協力を仰ぎまして、このたびの法人昇格のご挨拶とさせていただきます。

来館者／記念来館者

開館以来、多くの皆様にご来館をいただきました。その中には各方面の最前線でご活躍中の方々の顔ぶれもありました。環境のため、空気中の二酸化炭素量を減らすためには、「木材利用が一番有効な手段」であることを、わかりやすく解説している施設の一つとして、視察に来館された方もいらっしゃいます。約1万人／年の方に当館をご利用いただいています。

●平成27年末現在 見学された団体／約1100団体



定期情報誌「木と合板」

主な出来事	
2005年	JKホールディングス株式会社 吉田繁氏、セイホク株式会社 故 井上博氏の発案により、学識経験者、木材・合板関連団体及び企業が参加し、博物館設立が計画される
2007年10月	東京・新木場 新木場タワー3階、4階に「NPO木材・合板博物館」オープン
2008年5月1日	NPO木材・合板博物館 定期情報誌「木と合板」 創刊
2008年10月15日	第1回 「木と合板」写真コンテスト 開催
2008年	第1回 クリスマスツリー植林 (物産部主催)
2010年1月	【展示】環境を学ぼうコーナー 新設
2011年1月	【展示】接着剤コーナー リニューアル
2011年10月	平成23年度木づかい運動感謝状 拝受
2012年10月	第1回 ウッドマスター (基礎) 講習会 開催
2012年10月	【展示】浅野吉次郎氏コーナー 新設
2013年6月	【展示】ペニャレース初号機 可動模型設置
2013年11月3日	「合板の日」制定(日本合板工業組合連合会・日本合板商業組合と共同)
2014年10月	「内装木質化ハンドブック」 発行
2015年2月	【展示】木育コーナー 新設
2015年10月	特定非営利活動法人木材・合板博物館から公益財団法人木材・合板博物館へ運営が譲渡される
2015年12月	「RC/SC造建築物における内装木質化設計マニュアル」の作成が『ウッドデザイン賞2015』ソーシャルデザイン部門林野庁長官賞(優秀賞)受賞

あの方も来館!!



2009.3 吉野環境副大臣



2014.1 江藤農林水産副大臣



2009.7 内藤林野庁長官



2010.8 皆川林野庁長官



2014.1 沼田林野庁長官



2014.8 今井林野庁長官



2015.7 8万人記念来館者 (東京都市大学)

2008年11月 10,000人達成
2010年3月 20,000人
2011年5月 30,000人
2012年4月 40,000人
2013年2月 50,000人
2013年12月 60,000人
2014年9月 70,000人
2015年7月 80,000人



2011.1 鹿野農水大臣



2011.2 ガニバークPEFC森林認証事務局長



2015.11 森山農水大臣



2013.9 麻生副総理大臣

私たちの8年間の主な活動を紹介します

ウッドマスター講習会



●2012年 第1回ウッドマスター(基礎)講習会開催
2015年で基礎講習は4回目、中級講習は3回
目の開催。木材業界への貢献として専門知識向上を
目指し、人材育成に力を入れています。

「合板の日」記念式典



●2013年 「合板の日」制定
1907年11月3日に故浅野吉次郎翁が、独自に
ロータリーレースを開発し、我が国で初めて「合板」
を製造したことに敬意を表し、また森林林業・合板
機械・接着剤・物流流通等合板産業に関わるすべて
の業界が我が国合板業界とともに大きく発展する
ことを祈念して、11月3日を我が国の「合板の日」と
することを宣言しました。

工作体験



●2014年6月より いつでも工作体験開始
来館者の強い要望から「いつでも工作体験」を開
始し、2015年には初めて出張工作も行いまし
た。シナ合板の表面を焦がす「ウッドバーニング体
験」は、イベント出展でも人気があります。タレン
ト・俳優として活躍中の『きたろう』さんが、テレビ
番組「夕焼け酒場」の撮影で来館された際には、と
ても上手にささっと焼き鳥を描いておられました。

「木と合板」写真コンテスト開催



第7回「木と合板」写真コンテスト
優秀賞・特別審査員賞 受賞作品

●2008年 第1回「木と合板」写真コンテスト開催
2015年で7回目を迎えた当館主催の写真コ
ンテストです。「回を重ねることに応募作品のレベ
ルが上がってきた」と特別審査員も驚いています。

クリスマスツリー植林 植林祭



●2009年 第1回 クリスマスツリー植林実施
当初は物産館主催で行われていましたが、3回目
の2013年より当館が主催となり、2015年で
7回目を迎えました。年々、参加者も増え植林活動
も充実してきました。

様々なメディアで当館が登場!!

放送されました



雑誌やWEBを始め、テレビの取材なども受ける
ようになり、当館の活動を広く知っていただく機会
を作ることができました。

木工教室



●2008年 第1回 木工教室開催
毎年人気の木工教室は、参加希望が多く抽選制
になるほどです。夏休みの自由研究にジグソーパ
ズル・コリントゲーム・ビー玉ころり等を作ります。
2015年にものづくりコーナーの隣に「木育コー
ナー」を開設し、今では皆の憩いの場になっていま
す。

スタッフからの message

- 平川泰彦副館長
皆様のお世話になりここまで来
ることができましたが、今後は
小さな子供さんから大人まで多
くの人々から愛される博物館と
なることを目指していきたいと
思います。
- 赤石和義チーフプロデューサー
博物館がオープンして今思えば
8年が経ち、この間合板工場は
じめ流通業界も日々変化があり
ました。今後のいろいろ変化が
あると思うので、それらに対応
してゆきたいと思います。
- 杉村雅通副館長
昨年、縁あって当博物館で働く
ことになりました。新しい業界
でのチャレンジとなりますが、
日々精進し魅力ある博物館を目
指して、今後の発展に貢献でき
よう頑張りたいと思います。
- 長谷川麻紀
当初は参加人数が少なかった木
工教室も抽選制をとるほどの人
気で、写真コンテストも年々レ
ベルの高い作品が多くなりました。
今後も参加型イベントを企
画していきたいと思います。
- 新谷百々香
国立競技場の建設デザインが木
質化したり、じわじわきている
DIYブームで木材や合板のこと
をもっと知ってもらえるように
活動していきたいと思います。

展示リニューアル



開館以来、「環境」「接着剤」「浅野吉次郎」「木
育」「学び」「シアター木質化」「木構造モニメン
ト」「ミュージアムショップ」など、展示コーナーの
新設やリニューアルにより、来館者に親しみやすく
分かりやすい展示を工夫しています。

工場見学



●2009年 第1回合板・LVL工場見学ツアーと木工体験開催
毎回好評を得ている工場見学も、7回を数えるほ
どになりました。2015年の工場見学は、見学の
あとに工場で出る端材を使った自由工作を行うう
など内容の充実を図りました。

各種イベント会場出展



2008年より「ジャパン建材フェア」「みどり
とふれあうフェスティバル」「エコライフフェア」
「エコプロ」などに出演しています。当館キャラクタ
ー「Gokun」はいつもみなさんの人気者です。

内装木質化ハンドブック出版



●2014年発行「A4判80頁」
●2015年「ウッドデザイン
賞2015」ソーシャルデザイン
部門 林野庁長官賞(優秀賞)受賞
木材を使用したい設計者、デザイナー、施工者向
けに多岐にわたる関連法令を整理し、一般木材加工
品の普及による内装の木質化を促進させることを
目的とし作成しました。

新木場漫歩

川上から川下まで、よりシームレスに結ぶ 仕組みづくりをめざす 木と緑をコーディネートする木材総合商社

新木場タワービルの7階。眼下に貯木場を見下ろす、明るいフロアに物林社員の活気があふれています。その一角の応接コーナーで、淡中社長にお会いしました。

広葉樹輸出から始まった、 わが国木材商社の近代史

社歴のルーツは古いとお聞きしています。前身は旧三井物産小樽支店で明治30年代から事業展開しています。1944年（昭和19年）三井木材工業株式会社に引き継がれた山林、木材事業と、本州各地にあった三井物産社有林の管理運営のため設立された三井物産系列の旧三井林業株式会社が存続会社として統合し、旧社名三井物産林業株式会社として発足したのが1967年（昭和42年）です。



「木のまち 新木場」とその周辺エリアで、気になる会社、企業、人物、スポットを紹介する新木場漫歩のコーナー。今回は、木材・合板博物館もある新木場タワービルの6、7階に全国拠点を置く、物林株式会社さんをお訪ねしました。同社は、木材流通と木造建築、緑化をはじめとする景観や環境事業まで、「木と緑」に関連する事業を幅広く展開する木材関連商社です。迎えて下さったのは、同社代表取締役の淡中克己（たんなか かつみ）社長です。淡中社長は、木材・合板博物館が毎年主催するウッドマスター（基礎）講習会で、木材流通をテーマに講師もつとめておいでです。本誌が初めて聞く木材流通の歴史。同社のルーツが、明治時代に遡るわが国木材流通業の歴史に深く関わっていたことを教えていただくことになりました。



意外と思われるかもしれませんが、創業時の弊社の主な扱い品は広葉樹だったんです。社歴を話すと長くなるけど（笑）。資料を見ると弊社前身の事業は、広葉樹の輸出から始まっています。明治30年代から昭和初期に至る時期です。特に北海道産のミズナラが大量にヨーロッパ向けに輸出されていた。近代初期日本にとって木材は有力な外貨獲得商品で、日本大手商社の木材部は、ほとんどがそこから始まったと聞かれています。その後、戦前には満州（現在中国東北部）の枕木材の需要などもかなりあったようですし、昭和40年代には化粧用の広葉樹単板・合板も大量に輸出されておりました。明治30年代から昭和40年代までおよそ100年、弊社前身のルーツを粗っ

ばくまとめると、そういう流れです。ミズナラがつないだ縁
― 国産木材の樽による新しいウィスキーブランド誕生秘話 ―
これはミズナラに関わる話題ですが、2000年頃、サントリー酒造さんではミズナラ樽で長期熟成したモルトウイスキーの評価がめつぽう高いと判りました。モルトの熟成樽には、ふつう北米産のホワイトオークを用います。では、このミズナラはどこからどのように調達したのか。サントリーさんが自社の歴史を紐解くと確かにミズナラで樽造った記録があり、その後の調査で三井物産の社有林（北海道）から出材したミズナラを、物林の先輩達が樽

材（丸太、製材）として販売していたことが判りました。数年前にサントリーの品質管理部長と北海道に足を運んで、ミズナラを伐り出したと思しき場所を探り当てました。その後、サントリーさんでは北海道産ミズナラの調達を再開しており、この新しい材が樽になるまで数年、さらにモルトの熟成に少なくとも7、8年、そろそろ呑める頃になったかもしれない（笑）。

「広葉樹の物林」時代を終えて

社歴の話に戻ります。戦後になって、木材の国内需要がぐっと伸びて来ます。内需が拡大する一方で、逆に輸出事業は先細りしていきます。私の入社年は昭和58年で、

エコプロダクツ 2015 ～森林からはじまるエコライフ展～ に出展しました。



2015年「ウッドデザイン賞2015」
ソーシャルデザイン部門賞
林野庁長官賞（優秀賞）受賞



当館が発行した冊子『内装木質化ハンドブック～内装制限を読みとく～』が【2015年「ウッドデザイン賞2015」ソーシャルデザイン部門賞 林野庁長官賞 優秀賞】を受賞しました。会場で授賞式が催され、当館から黒岩事務局長が出席し表彰状を頂きました。（2014年発行／A4判 80頁／監修・協力「NPO法人 team Timberize」）

- ▶RC / S造建築物における内装木質化設計マニュアルの作成
- ▶公益財団法人 木材・合板博物館
- ▶RC / S造建築物の内装木質化の「防耐火規制」の諸規定をわかりやすいマニュアルにした。インテリアデザイナーや建築士による、センスあるデザインの中で木という素材は主張されるべきと考え、需要増加に繋げる取組。



2015年12月10、12日、毎年東京ビッグサイトで開催される日本最大級の環境展示会。出展の回を重ねる毎に、企業の森や木材利用への意識が強くなっています。木質化展示や木育（子供が木と触れ合えるコーナー）展示も増え、さらにウッドデザイン賞の作品展示も加わり、来場者がより楽しめるコーナーも増えました。

インターンシップによる学生たちの受け入れ



2016年2月4、5日に東京都立第三商業高等学校の学生4名がインターンシップで職業体験をされました。昨年に引き継ぎ2回目となり、近所のジャパン建材（株）東京営業所、（株）銘林、北三（株）の協力も得て、学生さんたちは働く事の意義を学ばれました。



表情や身振りも豊かな淡中社長のお話です



物林株式会社Butsurin

本店 〒136-8543 東京都江東区新木場1丁目7番22号
(新木場タワー6・7F)
TEL 03-5534-3580 / FAX 03-5534-3599
URL: <http://www.mbr.co.jp/>

その頃若干ですがまだ輸出もあった覚えがあります。それまで日本の広葉樹、特にミズナラは、ヨーロッパ一部はアメリカでも需要は高く、ナラだけでなくカバなども、合板等に加工して輸出していました。が、これも昭和末期までで、広葉樹の流れは輸出から、家具、床材などの内需にシフトしていく。それも今や、中国やベトナムに生産基地が移るようになり、国内生産量も大きく減りました。

1989年(平成元年)に、ニューヨークに物林アメリカ㈱を設立しました。当初目的は、供給減から不足の道産広葉樹を米国産広葉樹に代替えるためでした。その後も広葉樹事業そのものは縮小し、物林アメリカ(現在のAlaska Pacific Trading)の仕事も建築用とした、針葉樹関連の調達为中心の業務となりました。

現在、弊社の年間売上高は約290億円ですが、広葉樹関連は20億前後といったところ。かつては、広葉樹製品営業部とか広葉樹営業室などのセクションもありま

仕入は輸入が3分の2、残りが国産材です。産地は針葉樹がヨーロッパ・北米が多く、広葉樹が主にアメリカです。弊社はスプリースの扱いが多くて、日本での供給量は一番かと思えます。これは建築よりも建具など造作系需要で、ピアノ等の楽器にも使われています。

公共建築物木材利用促進法の施行などの国の後押しがあって、大型木構造の建築などで少しずつ国産材も増え始めてきました。弊社でも、2000年に北海道プレカットセンター株式会社(100%出資で参加し、北見の構造用集成材工場である協同組合オホーツクウッドピアに一員として参加する)と、道内ビルダーに道産材を供給する拠点としています。大きな利益はありませんが、ニーズが見え始めています。認知が広がってきたことは素直にいいこと

とです。

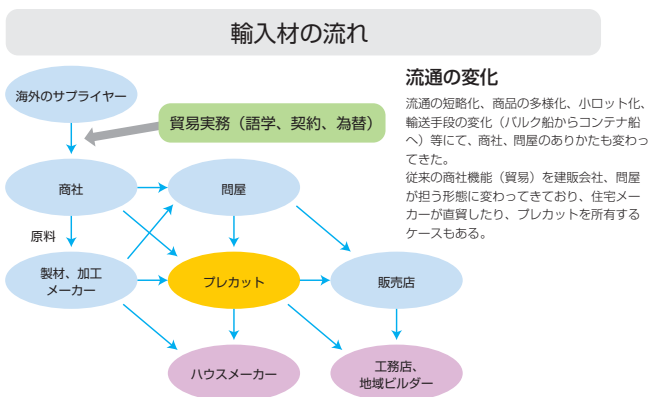
川上から川下をつなぐ、「現場の分ける流通業」を

今は国内需要が伸び悩んでいる。量を多くして価格を安くという時代ではなく、量を買って売ってという発想ではなく、量よりも品質を追及しながら、新しい物流のあり方を創造していかなければならないのだと思います。そのための情報、そのための目線の確かさが求められます。最終的に建設というエンドユーザーのニーズまでたどり着いた時のトータルなコストパフォーマンスも視野に入れなくてはならない。単品の良し悪しだけでなく、全体として効率良いシステムをめざす努力が必要です。弊社では、これを「仕組みづくり」と呼んでいます。

したが、10年前に解消しました。残念ですが「広葉樹の物林」は終わりを迎えることになったわけです。
現在弊社の事業形態は、「木材関連」と「建設関連」の二つの括りにしています。川上から川下まで、木材流通の全体を俯瞰する営業展開ですが、川上と川下のどこが分岐になるかというプレカット工場です。この工程から上を「川上」と位置づけ、木材営業部、国産材営業部がポジションを占めます。一方、「川下」には住環境システム部、非住宅営業部、特建事業部、東北復興部、環境・景観事業部があります。

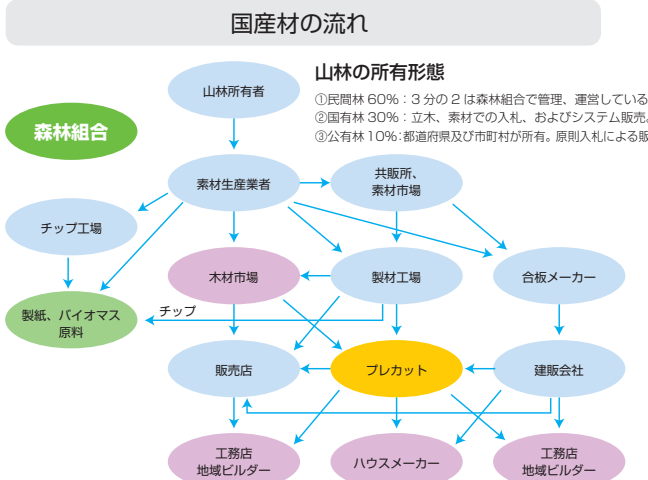
木と緑をコーディネートする 木材総合商社

環境・景観事業部というのは少し毛色が違って見えるかもしれませんが、弊社の特徴をなす事業の一つで、1971年(昭和46年)に緑化事業部としてスタートしました。「日本列島改造論」が発表されたのが1972年。1967年の会社設立からま



流通の変化

流通の短絡化、商品の多様化、小ロット化、輸送手段の変化(バルク船からコンテナ船へ)等にて、商社、問屋のありかたも変わってきた。
従来の商社機能(貿易)を建版会社、問屋が担う形態に変わっており、住宅メーカーが直買したり、プレカットを所有するケースもある。



山林の所有形態

- ①民間林 60% : 3分の2は森林組合で管理、運営している。
- ②国有林 30% : 立木、素材での入札。およびシステム販売。
- ③公有林 10% : 都道府県及び市町村が所有。原則入札による販売。

だ間もない頃です。高度経済成長時代から、ようやく環境整備にも目が向けられる時代になり、街路樹整備や公園緑化などの事業などが注目株になりました。造園関連事業がクロージアアップされて、この頃企業の多くが何をしたいかというと、土地を買いあさって、苗圃(ひこかん)つまり苗木を植える土地の取得に競って参入しました。商社、製紙、鉄道系の会社などが、こぞって投資しましたが、結果から言うと大きな失敗に終わりました。当社の親会社であった三井物産も例外では無く、全国に100haもの苗圃をもっており、この後を物林が引き継ぐというかたちで始まった事業部です。

てきています。大きな施設の病院や学校などの戦後のインフラが老朽化し、この建て替え需要に伴う耐震工事と併行して導入されるようになりました。各自自治体ごとに条例も整備され、これが後押しする。民間事業でも郊外型の大型店舗などにも雨水槽の設置が義務付けられるようになってきました。売上は環境景観事業部の約2割を占めています。
東北復興まちづくり支援に続き、地元江東区の地盤を生かし東京五輪の景観整備に貢献したいと思っています。
全社の売上比率では「川上」の木材営業本部が6割、「川下」の建設本部が4割といったところでしょうか。社員の人数比率はこの逆で、建設にはそれなりのマンパワーが必要とされますから。
木材営業本部の売上は約150億で、そのうち広葉樹は20億弱、他の多くが針葉樹です。

協同組合 オホーツクウッドピア
OKHOTSK WOODPIA

住所: 091-0022 北海道北見市南辺町加11
電話: 0157-67-2323
FAX: 0157-67-2324
MAIL: info@okhotsk-woodpia.jp
URL: <http://www.do-sumaizukuri.com/madein/008okhotsk.html>

■協同組合概要
住所: 〒091-0022 北海道北見市南辺町加11番地
設立: 平成9年3月
出資金: ¥3,000万円
組合員数: 成員/15社

北海道の福林木を利用した住宅用構造材を供給する、環境型社会発展のコンピニートです。

■実績計画カテゴリー(380)

■特徴

- ・フィンガージョイントにより、高精度で低含水率のリサイクル建築材を実現。
- ・一枚ごとに含水率とヤング係数を測定、印刷した。無垢材の建築構造材。
- ・最大長12,000mm×厚さ240mm×幅1,200mmのJAS認定構造用集成材。

■生産品目/
住宅プレカット、建築構造材、中継置・大断面集成材

■主な用途/
柱・通柱・梁・桁・主桁・2×4部材・間柱材・断木・ドーチ・天井野縁セット・内外壁下地材

TOP | 広報 | 森林・流通 | 建設資材 | 家具・建具 | 断木・梱包製品 | クラフト・応用製品 |

Last Update 01/17/2005 Copyright(C) 協同森林業・林産業振興協議会 All Right Reserved

協同組合オホーツクウッドピアのHP
http://www.rubeshibe-rinsan.com/pages/15_okhotsk/index.htm

間口を大きく広げつつ、これを見渡ししながら、全体のコストダウンや適材適所のあり方をめざす「全体の仕組みづくり」を考える。これを担う人づくりは、けっして一朝一夕になるものではありませんが、そこが課題です。それぞれの現場で起きていることを理解できないと、判断も提案もできません。だから、これを若い社員には「現場の分ける流通業」と言っています。弊社の年齢構成は、30代が薄く、40・50代が多い。私の世代の下も少ない。このいびつさ

は業界全体にも言えますが、これを成長が期待できる若い世代の力で埋めていこうと考えています。

弊社の業態は川上から川下までを網羅しています。この全体を俯瞰したところから、シームレスな仕組みづくりをめざします。ご相談さえいただけたら、さまざまなアイデア、ノウハウをご提供できる自負があります。弊社に資産はありませんが、人材があります。

《後記》

ミズナラ樽で熟成したウイスキーが、左党の間で密かなブランドとして話題になっていることは、4年前本誌の取材でサントリイ・白州蒸留所に伺ったときに聞いていました。それが、物林さんの扱いになった北海道産ミズナラだったとは新鮮な驚きでした。「木」をめぐる世界の因縁、知れば知るほど興味深いものがあります。

広葉樹の輸出に始まったわが国木材商社の近代史。「広葉樹の物林」の時代は幕を閉じ、新しい木の時代に向けた仕組みづくり、新しい物林(株)の時代に向けた離陸が始まっていることを感じました。

淡中社長のお話は流みなく、飽きさせず、あつという間のひとときでした。「ウッドマスターで鍛えられたんですよ(笑)」。淡中社長、今度のウッドマスター(基礎)講習会も、またよろしく願います。
(博物館スタッフ 長谷川麻紀)

